

～ 社会人基礎力育成グランプリ ～

活動の様子



2025年度 人生100年時代の社会人基礎力育成グランプリ
近畿地区予選大会 審査結果発表

🏆 優秀賞 🏆

発表番号⑤
流通科学大学

「『本屋がほしい』の声から始まった
一箱古本市：調査を実践につなげた1年の挑戦」

企画・活動概要

「人生100年時代の社会人基礎力育成グランプリ」近畿地区予選大会(2026年2月8日・Webexオンライン開催)に参加した。発表タイトルは「『本屋がほしい』の声から始まった一箱古本市：調査を実践につなげた1年の挑戦」である。2年次に大学近隣の商業施設「BRANCH神戸学園都市」で実施した来場者アンケート調査(209名)での知見をもとに、3年次に「一箱古本市」を自主企画・運営し、2025年12月14日に同施設で開催(30店舗出店)した。この調査から実践に至る一連のプロセスを上記大会にて発表し、優秀賞を受賞した。

経緯・背景・目的

2年次後期、BRANCH神戸学園都市から依頼を受けて来場者アンケート調査を実施した結果、「中学生・高校生になった子どもが来なくなっている」最も欲しいテナントは本屋」という知見を得た。しかし調査報告で活動を終わらせることへの問題意識が学生の中に生まれた。常設書店の誘致が困難という制約の中で「どうすれば調査結果を地域に還元できるか」を半年以上模索し続けた。その長期にわたる調査・悩み・実践というプロセス全体が社会人基礎力の涵養につながるという認識のもと、今回の取り組みを対外的に評価してもらうことを目的として、グランプリへの参加を決定した。

取り組む課題

アンケートでニーズとして浮かび上がった「本屋」の要望に対し、常設書店の誘致は現実的に不可能という壁に直面した。この制約のもとで「調査結果をどう実践につなげるか」を半年以上考え続けた。また3年次、「一箱古本市」の企画を施設側に持ち込んだ際、「独りよがりではないか」「本当に人が来るのか」と繰り返し問われ、提案内容の根本的な見直しを迫られた。チーム内ではリーダーへの業務集中による停滞が生じ、情報共有の遅れが施設側への対応にも影響した。ゼミ生全員が当事者意識をもって動ける体制をいかに構築するかという内部課題にも、企画推進と並行して向き合わなければならなかった。



本学(学生)の役割

ゼミ生9名全員が主導してプロジェクトを進めた。2年次は依頼に基づく調査だったが、3年次の一箱古本市は学生自ら施設に企画提案した点が大きな違いである。広報・デザイン・会計・連絡担当など役割を明確に分担し、フリーリーダーが生じないように「なぜこの企画をやるのか」という目的をメンバー全員で繰り返し確認する仕組みを自分たちで設けた。出店者募集のチラシ・ポスター作成、SNSでの情報発信など、はじめてのことが多かったが、ゼミ生全員で状況を共有することで乗り切った。指導教員は伴走者役に徹し、学生の主体性を引き出すことに注力した。

活動結果・成果・学生が成長した点・学生が身につけた能力

2025年12月14日にBRANCH神戸学園都市地下1階で一箱古本市を開催した。集客には課題が残ったものの、来場者への本の販売を実現し、調査で得た声を地域に還元することができた。この成果を発表した2026年2月8日の近畿地区予選大会(8チーム参加)では優秀賞を受賞した。学生は「依頼されたからやる」姿勢から「自分たちが当事者として動く」姿勢への変容という大きな成長を遂げた。施設との交渉を通じ相手の立場に立った提案力・対話力を、チーム運営の試行錯誤を通して自律的な遂行力をそれぞれ習得し、社会人基礎力三要素すべてにわたる成長が外部審査においても高く評価された。



指導教員および関係者の紹介

<指導教員>



商学部
マーケティング学科
准教授
新 雅史(アラタ マサフミ)

<専門・担当科目等>
商店街研究

<関係者・企業等>

社会人基礎力育成グランプリ